

書評

入江哲朗
『火星の旅人——パーシヴァル・ローエルと
世紀転換期アメリカ思想史』

（青土社、2020年）

大久保美春

はじめに

本書はボストンの名家に生まれながら、家を飛び出して、日本研究と火星の観測に身を投じたパーシヴァル・ローエル（Percival Lowell, 1855–1916）の生涯と業績を、世紀転換期のアメリカ思想を背景に語った大著である。登場人物、参照される英文和文の著書、論文、当時の新聞や雑誌の数は膨大で、本文は384頁、二列に小文字で記された註は55頁に及ぶ。

日本語で読めるローエルの伝記は僅か二冊しかない。一冊は新書版の短い本で、もう一冊はデイヴィッド・シュトラウス（David Strauss）が2001年に刊行した『パーシヴァル・ローエル——ボストン・ブラーミンの文化と科学』（邦訳は2007年）であり、これが英語圏における唯一の包括的学術的な伝記だという。したがって入江哲朗氏による本書が日本語で書かれた唯一の本格的な伝記ということになる。この書がパーシヴァル・ローエル研究を大いに深め広げる労作であることは間違いない。

ローエルは日本研究者、火星運河説の提唱者として、またローエル天文台の名前によって知られるが、本書は彼の思想や行動の背景となるローエル家の歴史、ハーヴァード大学の教育、世紀転換期のアメリカ思想史、天文学の状況などを非常に丁寧に調べることによって、これまであまり紹介されなかった側面からローエルに光をあてた。それによって彼を多面的に理解することを可能にした。これが本書の最大の魅力であるといえよう。

本書の構成は、序章「消滅する媒介者」、第1章「マサチューセッツ州ボストン」、第2章「マサチューセッツ州ケンブリッジ」、第3章「石川県鳳至郡穴水村」、第4章「アリゾナ州フラグスタッフ」、第5章「火星」、結論「イマジナリー・ライン」となっていて、読者がローエルと一緒に旅をしながら、彼の人生を追体験するという仕掛けになっている。

第4,5章では当時の天文学の動向を背景に、ローエルの火星観測への情熱が語られるが、筆者はローエルと日本との関係を中心に本書の意義を論じてみたい。

1. 「家」対「個人」

パーシヴァル・ローエルを論ずる際に先ず注目すべき点は、彼がボストン・ブラーミンという上流階級に属するローエル家の出身だということである。彼は当時アメリカ合衆国の経済的知的活動の中心であるマサチューセッツ州ボストン市のまさに中心に位置するト

レモント・ストリートで1855年3月13日に生まれた。こうした環境で生を受けたことが、彼の華やかな将来を約束するかのようであった。父親は繊維産業の経営者として、また、銀行・保険・鉄道などへの投資家として莫大な富を築いていた。母親はボストン・ブラーミンのローレンス家の娘であった。

本書の主人公は、1639年にイングランドのブリストルから商業的野心を持って新大陸に渡ってきた初代パーシヴァル・ロウル (Percival Lowle) から数えて10代目に当たる。その間の二百余年の間に、ローエル家は、卸売り貿易商、革職人、牧師、弁護士、詩人、批評家、企業家、投資家、大学教授などを輩出しながら発展していった。政治力、経済力、文化力を付けたローエル家は、ボストン・ブラーミンといわれる上流階級の仲間入りを果たす。ローエル家の歴史は、ボストン・ブラーミンの誕生と発展の様子を知る上でも興味深い。ローエル家の系図からはキャボット、ラッセル、エイモリー、ローレンス、ビゲローといった他のブラーミンとの結婚の様子も読み取れる。ローエル家の歴史を辿ることで、マサチューセッツ州が発展していく様子や、「ローエル」という町の名前の由来もわかる。第1章は当時の米国史に興味を持つ読者にとって特に興味深い内容といえよう。

パーシヴァル・ローエルの名前が初代パーシヴァル・ロウル、すなわち1639年にイングランドからニューイングランドに移住してきた68歳の卸売貿易商の名前に由来するという著者の指摘は重要である。主人公のパーシヴァルも野心家で、旅を重ね、様々な分野で開拓者としての役割を果たしていくからである。

一年後に生まれた弟はアボット・ローレンス (Abbott Lawrence Lowell) と名付けられる。アボット・ローレンス (Abbott Lawrence) は母方の祖父であり、父方の祖父のビジネスパートナーであった。それぞれ由来が異なる名前を付けられた年子の兄弟は、興味深いことに正反対の人生を歩む。長男のパーシヴァルは定職に就かず、53歳まで結婚せず、死後は彼の天文台があるアリゾナのマーズ・ヒルに葬られた。次男のA. ローレンスは弁護士からハーヴァード大学の政治学の教授となり、その後ハーヴァード大学の学長を24年間務め、ボストンで亡くなった。次男は若い時にローエル一族の女性と結婚している。二人の違いはどこから生じたのだろうか。弟は兄の伝記 (Biography of Percival Lowell, 1935) を記していて、本書でも度々引用されるが、より詳しい紹介が欲しくなる。

パーシヴァルの生きた時代は南北戦争によってアメリカの社会や価値観が大きく変わった時代であった。著者はその様子を知識人たちの言葉を引用して巧みに描く。例えば、H.G. ウェルズ (H. G. Wells) は、ボストンからニューヨークに国の中心が移っていくさまを「ボストンの収容力は……一八七五年までに人間の知性が打ち立てた業績すべてを内包するのにちょうど十分であり、それ以上の余裕を持たなかった……ボストンは満杯になった」(75頁)とユーモラスに記した。ローエル家を支えてきたボストン・ブラーミンやユニテリアンというステータスは、ローエルの時代にはもはや時代遅れとなっていた。親子の間で意見が対立することもあった。パーシヴァルは、家父長的で、厳格で、保守的な父親とは反りが合わなかった。彼が1883年に地球の反対側の日本に旅立ったこと、1897年に神経衰弱に陥り、4年間苦しんだことの背景には、厳しい父親の存在があったと思われる。一方、彼は母親とは「日々途切れることのない愛情溢れる手紙」(258頁)によって親密に結ばれており、三人の妹たち (一番下はイマジストの詩人として名高いエイミー・ローエル [Amy Lowell]) とも頻繁に手紙を遣り取りしていた。家族よりも個人を優先するパーシヴァ

ルの生き方のために、母親の死後は、彼と父親の関係がさらに悪化し、天文台をめぐっても弟と対立し、彼の葬式には親戚を代表して妹のエリザベス(Elizabeth Lowell)と夫のウィリアム・ローエル・パトナム(William Lowell Putnam)しか出席しなかったという。

パーシヴァルがローエル家に生まれたことには利点もあった。その最大のものは莫大な財産である。彼は常に高級な背広を身に纏ったお洒落な紳士として写真に写っている。世界中を旅する費用、天文台の設置、望遠鏡の調達等には多額の資金が必要であったはずだが、彼がお金の工面に苦労した様子は見られない。父親の事業に投資をしたり、ボストンの財政界の中心的人物となる義弟のアドバイスを受けながら様々な投資を行っていたようである。ただし、金持ちゆえの驕りもあったようで、日食の観測を共にした天文学者のメイベル・トッド夫人(Mabel Loomis Todd)などは「お金持ちはたいいてい、自分は何でもできると思い込んでいる」(291頁)とパーシヴァルを非難している。

彼はまた一族の文化的遺産を頻繁に利用していた。一つはローエル・インスティテュートである。これはローエル家8代目の一人、ジョン・ローエル・ジュニア(John Lowell Jr.)の遺言によってボストンに設立された研究機関である。初代の理事にはパーシヴァルの祖父、二代目は父、三代目は弟が就いている。ローエル・インスティテュートはローエル・レクチャーという一般向け講演会を主催した。パーシヴァルはエドワード・シルヴェスター・モース(Edward Sylvester Morse)がローエル・インスティテュートで行った日本に関する連続講演を聴いて日本に興味を持った。彼自身も火星について何度かローエル・インスティテュートで講演をおこなっている。二つ目は雑誌『アトランティック・マンスリー』である。この雑誌はローエル家8代目の別の一人、ジェイムズ・ラッセル・ローエル(James Russell Lowell)が創刊に関わり、初代編集長を務めた。『アトランティック・マンスリー』はパーシヴァルが日本や火星に関する研究成果を最初に発表する場であった。三つ目は名誉職や名誉学位である。火星研究に打ち込んでいた時期に彼はマサチューセッツ工科大学(Massachusetts Institute of Technology, MIT)の天文学の客員教授に就任する。クラーク大学とアマースト・カレッジからは名誉学位を授与される。何れもローエル家のコネクションのお蔭であった。

ローエル一族が築いた経済的文化的基盤が無ければ、彼の野心的で多額の費用を必要とする計画が実現し、世間の注目を浴びることがなかったかもしれない。その意味でも本書のローエル家の紹介は重要な意味を持つ。

彼が極めて個性の強い人物であったことは誰もが認めているが、その点で興味深いのは、彼が日本人を正反対のインパーソナル(impersonal)な性格の持主であると理解したことである。彼がボストンを脱出したきっかけが、家父長的な父親から逃れることであったことを考えると、日本が家父長的な社会で、皆が父親や祖先を敬い、彼らの命令に従って生きているように思われたことは、彼にとって衝撃的な発見であった。日本は「さかさま」で「あべこべ」の社会であった。彼が否定する倫理が日本社会の倫理であった。ところが、そこから彼が引き出した結論は、個性的な西洋人の方が、インパーソナルな極東人より優れているということであった。彼は当時流行していたハーバート・スペンサー(Herbert Spencer)の社会進化論を用いて、地球を東から西に進むにしたがって、つまり進化するにしたがって、個性が強くなると独断的に結論する。その際どちらの国民がより幸せかということは全く考慮しない。

2. 「ジェネラリスト」対「プロフェッショナル」

ジェネラリストでありつつ、プロフェッショナルであろうとしたローエルの姿勢には当時のハーヴァード大学の教育方針が影響していると考える著者の指摘は説得的である。

5代目のジョン・ローエル(John Lowell)以降、歴代のローエル家の息子たちはハーヴァード大学で学び、パーシヴァルの父親の世代までは、ジョージ・サンタヤナ(George Santayana)が皮肉を込めて名付けた「お上品な伝統」教育を受けていた。「医師であり教師であり詩人でありエッセイストであったホームズ博士が身をもって示したように、好奇心の赴くままにあらゆるものに手を伸ばす柔軟な精神こそがボストン・ブラーミンの美德」(93頁)であった。しかし、ブラーミンの一人で、1854年に入学したヘンリー・アダマス(Henry Adamas)は「ハーヴァードは指導者を育てようとはしなかった…型は創造したが、意志は創造しなかった」(92-93頁)と大学の教養教育を批判した。1872年パーシヴァルが入学した時は、新学長のチャールズ・ウィリアム・エリオット(Charles William Eliot)の下で大改革が行われ始めていた。1869年、35歳の若さで学長に就任したエリオットは40年間学長を務め、全人的教育を行ってきたハーヴァード大学をプロフェッショナルの養成機関へと変えていく。ギリシャ語ラテン語を必修科目から外し、選択科目制を導入して、大学の専門化、近代化、拡大化を図った。

ローエルは1872年に入学した142名の一人で、選択科目制という新しいシステムを活用して、数学と物理学から八つ、古典語と歴史から六つの授業を選択した。優秀な成績を修め、「星雲仮説」と題する天文学の論文を書き、「エリザベスの死からアンの死までにおけるヨーロッパ列強のひとつとしてのイングランドの地位について」という論文では、名誉あるボードイン賞を受賞する。

ジェネラリストとして様々な分野に興味を示したローエルだが、プロフェッショナルになれなかったのはなぜだろうか。日本研究を例にとってみよう。彼の日本滞在期間は他の日本研究者に比べると短い。彼は1883年から1893年までの10年間に四回来日しているが、滞在期間はそれぞれ8カ月、5カ月半、6カ月半、11カ月で、合計しても2年7カ月である。ローエルより2年前にハーヴァード大学を卒業し、お雇い外国人として来日し、日本美術研究のプロフェッショナルになったアーネスト・フランシスコ・フェノロサ(Ernest Francisco Fenollosa)やローエルの5年前にハーヴァード大学を卒業して来日し、日本美術・工芸品の虜となり、また仏教徒になった従兄のウィリアム・スタージス・ビゲロー(William Sturgis Bigelow)は、10年以上日本に滞在している。ローエルが日本で親しく付き合った言語学者のバジル・ホール・チェンバレン(Basil Hall Chamberlain)は38年間、作家のラフカディオ・ハーン(Lafcadio Hearn)は14年間日本で暮らしている。彼らと較べるとローエルの日本滞在はかなり短い。日本滞在中を楽しみ、日本から多くのことを学んだローエルだが、日本に惚れ込むことはなかった。よって日本を深く研究することもなく、結局はプロフェッショナルにはなれなかったと筆者は考える。

3. 「理性」対「共感」

ローエルは極めて鋭い知性の持主であった。卒業時にはファイ・ベータ・カッパという成績優秀者の社交クラブの会員に選ばれ、1889年には大学の卒業式に出席して、ファイ・ベータ・カッパで自作の詩を朗読している。彼の文章からは幅広い教養と鋭い知性が読み取れる。この知性がプラスに働いたのがユニークな視点から極東の人々を分析した『極東の魂』であり（ただし筆者はローエルの結論には賛同しない）、マイナスに働いたのが心理学の概論的理論を展開した『神秘の日本、あるいは神々の道——日本人のパーソナリティおよび憑霊に関する秘教研究』の「ヌーメナ (noumena)」の章であると筆者は考える。

ローエルの日本研究に関しては、著者が引用するチェンバレンとハーンの意見が興味深い。ローエルの隣に住み、多くの時間を共にした英国人のチェンバレンはハーンへの手紙で、ローエルは「すばらしく頭の切れる賢いやつで…彼のやり方は、ある一般的な観念…から演繹的に論じ下ろし、先入のアイデアに合致するように事実を歪め、言葉の花火によって全体に彩りを加えるというもの」(201頁) だという。ハーンはチェンバレンへの手紙で「私がローエルよりもずっと成功していると評されている…理由は単純に、世の人びとが、分析的ないし批判的なムードではなく共感的なムードのほうをより正当なものと考えからず…もっとも肝腎な面というのは感情であって、理性ではないからです」(195頁) と述べる。

ただし、二人とも最初からローエルを非難していたわけではない。ハーンが『極東の魂』を「神のような本」「一語だって読み飛ばさないでくれ」(132頁) と興奮して語ったことはよく知られる。チェンバレンも「物を書き始めた頃には彼はもっと人間的でした。いまや彼は硬化し、ひとつの機械と化しています」(201頁) と記している。

初期のローエルの文章には理論の展開ではなく、彼の日本での経験を具体的に描写した部分もある。『極東の魂』では、彼が夜店巡りをして掘り出し物を見つけて喜ぶ姿や、桜の花の美しさにうっとりする様子や、日本人が四季の花々を愛でる姿が生生きと描かれる。『能登——人に知られぬ日本の辺境』(チェンバレンに献呈される) の文章も読みやすく、彼と共に旅をしているような気分になる。田舎に暮らす日本人への温かいまなざしも感じられる。

『神秘の日本』では、御嶽山で偶然に「御座」という憑依儀礼を目撃したことから、神道の研究に取り組み、その学術的成果を紹介するが、著者が指摘するように当時ボストンで心霊現象の科学研究が流行していたことを考慮する必要がある。ローエルは、インパーソナルな日本人はトランス状態に入りやすく、トランス状態の日本人には彼らの祖先が現れることがある、と推察する。そこから彼の関心は、日本人という人種の祖先、地球上の人類の祖先、宇宙における生命の存在の可能性へと広がったのかもしれない。しかし後半では心理学の教科書的な議論が展開され(ウィリアム・ジェームズ [William James] の『心理学原理』を参考にしたという)、チェンバレンやハーンからは全く評価されなかった。

以上のように話題も文体も論じ方も異なるローエルの日本研究を、モースやビゲローはどのように見ていたのかも知りたくなる。モースは動物学者であり、1905年にはローエル天文台を訪れ、火星に関する本を書いている。ローエルの従兄のビゲローはハーヴァー

ド大学を出て医学の道に進むが、医者になることを強要する父親と対立し、モースの日本に関する講演を聴いて来日したという点でローエルとよく似ている。ローエルの日本美術の知識はビゲローから学んだのではないかと筆者は推測する。彼らはローエルと疎遠であったわけではないだろう。

ローエルにとって、インパーソナルな日本人は進化論を証明するための格好な材料を提供した。能登は彼が外国人として初めて訪れたという意味で記念碑的な場所であった（前年にドイツ人が訪れていたことが後にわかるのだが）。御嶽山で見た「御座」も彼が掘り当てた「金鉱」として意味があった。つまり、彼の日本研究は日本人を理解するためというよりは、自分の理論的な発見をボストンの人々に知らせるための研究であったのではないだろうか。彼の利己的な研究姿勢は、彼が名門ローエル家に生まれたことやハーヴァード大学の優等生というプライドに由来するのかもしれない。ハーバート・スペンサーの社会進化論を学んだゆえの白人の優越感かもしれない。あるいは異文化の研究者として、作家としての成功を狙ったからかもしれない。しかし、日本人が進化論的には西洋人に劣るという彼の考え方が変わらない限り、日本人や日本を愛する外国人たちの共感を得ることは難しいだろう。

おわりに

著者は本書によってパーシヴァル・ローエルを“消滅”から救うことを試み、彼を再び知的探求の舞台にのせることに成功した。ボストンが社会的思想的に大変換を遂げつつあった時代に伝統あるボストンの名家に生まれたパーシヴァル・ローエルが、いかにして自分を取り巻く伝統、家族、保守的な思想の壁に立ち向かい、自分が信じる道を進んだかが詳しく説得的に語られるからである。ハーンの非難がましい言葉によって先入観を持ってローエルを見ていた筆者は、彼の長所や欠点が必ずしも彼の個性だけではなく、彼が生まれ育った環境、彼が受けた教育、当時のアメリカの思想などに由来する面があることに最も興味を覚えた。

ローエルの優れた知力、洞察力は、当時流行していたスペンサーの社会進化論やウィリアム・ジェームズの心理学を用いたユニークな日本文化論を生んだ。強烈な個性の持ち主で、共感力に欠け、演繹的に論を進めるローエルには敵も多く、プロフェッショナルではなくアマチュア研究者であるがゆえに相手にされないこともあった。しかし批判されても、挫折しても、諦めずに次の目標に向かって歩いていく彼のアクティブでエネルギー的な姿勢は感動的である。パーシヴァル・ローエルは「開拓者」であり、「永遠の旅人」であった。